

2026年4月27日 日本テレビ定例会見

《要旨》

1. 営業状況

・放送収入

3月単月タイムセールスは、前の年の「MLB東京シリーズ開幕戦」の反動を受けて、前年比88.2%と減収となりました。スポットは、前年3月はフジテレビでのCM差し止めに伴う振替需要があり売上が伸びていました。その反動で東京エリアは前年比を下回る着地となりましたが、シェアは継続して高い水準を維持しています。タイムとスポット合わせての3月トータルの前年比は90.2%。2026年度は、イラン情勢による日本経済への影響が不透明な状況ではありますが、鋭意努力してまいります。

・放送外収入

(澤取締役専務執行役員)

映画では、劇場版「名探偵コナン ハイウェイの墮天使」の4月26日までの興行収入は79.8億円と好調に推移しています。「日比谷線の脱線事故の実話をもとに制作された感動作「人はなぜラブレターを書くのか」は4月26日までの興行収入は4.8億円で、内容面で非常に高い評価をいただいています。

イベントでは4月25日より丸美屋食品ミュージカル「アニー」が始まりました。今年で41年目というロングランを続けており、ここまでの累計の入場者は200万人を突破しています。ゴールデンウィーク明けの5月8日からは、「笑点」60周年記念イベント「笑点60周年特別展」を京王百貨店新宿店で開催します。

最後に海外戦略関連。海外事業ではコンテンツだけでなく技術も輸出しようというプロジェクトがあります。日本テレビが開発したAIソリューション「Go Vertical! AiDi」は、NBCスポーツなどで採用され、NBAのスポーツ中継で活用されています。世界最大級の放送・映像機器展NAB Show 2026において、「AiDi」が「Product of the Year ストリーミング部門」を受賞、また、同時に映像業界の専門メディア「TV Tech」誌の選出による「Best of Show Award」も受賞いたしました。

2. 質疑

新報道番組「追跡取材 news LOG」について

Q. 初回放送の所感は。

A. 視聴率を獲得するために工夫を巡らせるのではなくて、番組の目指すものが視聴者に伝わる放送にしてほしいと現場には伝えていきます。「追跡取材 news LOG」の個性をしっかりと伝えることができるよう2回目以降の放送の準備をしてほしいと思っています。和久田麻由子さんを日本テレビの番組で拝見するのは新鮮で、信頼感・安定感はさすがだと感じました。今後ますます和久田さんらしさと新たな和久田さんの一面を見せてもらえると楽しみにしています。始まったばかりの挑戦的な番組なので、皆さまからの様々なご指摘を真摯に受け止めながら、回を重ねるごとにブラッシュアップさせていきたいと思っています。

Q. 初回の視聴率への受け止めは。

A. 満足のいく数字とは言えませんが、まだ初回で認知も十分ではないので、見ていただいた方が、また視聴してくださる、それを重ねていき、多くの方に視聴していただくことができるようになればと思っています。初回だけの数字で判断はしておりません。

Q. VTR が長く、ライブ感が足りないのでは。

A. そういったご意見をいただいている一方で新しい番組を楽しく見たという意見もいただいています。物足りなさは感じましたが、初回ですので、回を重ねるごとに狙ったことがしっかり伝わる番組になっていくと期待しています。

Q. 取材のプロセスを見せることで記者が攻撃の対象になる可能性もあるが、記者を守る観点の考えは。

(伊佐治健取締役執行役員 報道担当)

A. SNS による記者あるいは番組に対する中傷は非常に大きな問題と考えています。日本新聞協会あるいは日本民間放送連盟といった私たちの業界の団体でも記者を守る対策というものは検討されています。取材に対するネット上の声に対しては、正面から受け止めながら、よく吟味して、受けとめるべきものがあれば、1つの情報として進めてまいります。なかには個人的な攻撃、誹謗中傷が多いことも事実ですので、報道局としても記者の安全ということに配慮しながら、SNS の時代に対処していかなければと思っています。今後、この番組は記者の取材のプロセスも示しながら伝えていくので、様々な声が予想されます。そこは正確で公正公平に、この番組のコンセプトでもあるニュースの核心をしっかりとつかみ取って伝えていくことで、報道の姿勢を示していき、視聴者の信頼を勝ち取り SNS 上においても取材に対する評価もいただければ嬉しいです。

4 月期の番組改編について

Q. 4 月期の番組改編全体の受け止めは。

(岡部取締役執行役員)

A. 「誰かと見たい、が、一番見たい」をテーマとして 4 月改編を行いました。今回の改編は視聴者の皆様に多くの共感をいただけていると思っています。

「追跡取材 news LOG」は、社長から所感を申し上げた通りです。

バラエティーは、17 日にスタートした「金曜ミステリークラブ!!!」。骨太な実話からハートフルな出来事まで様々なミステリーを出題しています。視聴者の皆様には SNS で「ミステリー会員」として個別の会員番号を発行し、一緒に考察を楽しんでいただいております。初回から数多くの投稿が見られました。二宮和也さん・千鳥のノブさんを始め出演者からも「ドラマに引き込まれ一緒に考察したくなる」という声をいただいておりますので、今後さらに盛り上がっていくことを期待しています。

ドラマについては、水曜ドラマ「月夜行路」は「THE 突破ファイル」の企画演出をしていたバラエティー出身のディレクターが初めてプロデュースを手掛けた作品になりますが、今クール GP 帯ドラマの中で TVer お気に入り登録数が現在 64.3 万人で 1 位となっています。土曜ドラマ「タツキ先生は甘すぎる!」は、親御さん世代を中心に、自分や家族のことに置き換えて深く考えてくださる方からの声や、悩みながらも子どもに寄り添おうとするタツキ先生を応援・共感する声を、多数いただいております。日曜ドラマ「10 回切って倒れない木はない」は、初回放送で世界トレンド 1 位を獲得しました。物語がどんどん加速していく中で、さらなる多くの方々の共感、広がりにつながると期待しています。

Q. 日曜ドラマのように、韓国のキャストが出演するドラマが増えているが、海を越えて共同制作をすることのメリットや意義は。

A. グローバルにビジネス展開をしようという目標は会社としてありますが、この日曜ドラマに関していえば、メリットを得ることを目指してキャストを決めているわけではなく、あくまでもドラマのテーマ、設定で、視聴者の皆様に楽しく見ていただくために決めています。このドラマをきっかけにコンテンツがアジアに広がっていくことがあればもちろん嬉しいとは思いますが。

SNS 上での内部情報漏洩について

Q. 「ZIP!」の新人スタッフによる事案についての受け止め。SNS 研修や管理体制について。

A. 大変重く受け止めています。本人は深く反省しています。社会人になったばかりのスタッフによる事案と承知していますが、研修については、新人のみならず全社的に様々な研修を行っており、「ZIP!」でも当該スタッフを含む新人スタッフに対し、4 月 1 日に、SNS 情報漏洩の禁止や、入構証の管理などを盛り込んだ「日本テレビ ZIP! 配属者の心得」に基づく研修を実施していました。しかしながら、本事案を招いたことは、我々の対応が十分でなかったと言わざるを得ません。「ZIP!」の現場のみならず、全社的に改めて情報管理の徹底を周知・指導するよう局長会等を通じて徹底しました。あわせて、外部協力会社を含めた管理体制の再点検を進めています。

「24 時間テレビ」について

Q. 総合司会の内村光良さん起用の理由、期待は。

(岡部取締役執行役員)

A. 今回の「24 時間テレビ」のテーマが「わたしの家族の話～あなたは誰を想う?～」このテーマに沿って内村さんの総合司会の起用につながりました。内村さんの持つ温かみ、優しさ、そして「世界の果てまでイッテ Q!」「THE 突破ファイル」といった内村さんが MC をしている番組の中で生み出されるファミリー感というものが家族をテーマにした今年の 24 時間テレビにふさわしいということで出演をお願いしました。

Q. 2 年間総合司会を務めた上田晋也さんについて。

A. 当初は上田さんに 1 年だけとお願いし受けていただいたのですが、もう 1 年引っ張って 2 年、総合司会を務めていただきました。感謝しかありません。テーマに沿って MC をお願いしているので、チャンスがあればまたお願いしたいと思っています。

京都府南丹市の事件の報道について

Q. メディア全体として、過剰な報道があるのではないかという指摘がありますが注意している点、報道量についての考えは。

A. 非常に塩梅が難しいですが、必要以上に繰り返しやっているとは思っていません。考え方は全て現場に任せていますので現場の方で然るべき対応をしていると信頼して任せています。

(伊佐治健取締役執行役員 報道担当)

A. 今回の事件は事件の詳細が明らかになればなるほど、事件の悲惨さ残酷さがクローズアップされています。私たち報道の使命として、現在、事案を追求し正確な情報を伝えるということ、また、警察の動きそのものを、的確であるかどうか検証しながら取材をして伝える義務があると思っています。その過程で、時としてかなり詳しく伝える中で、視聴者にとって辛く悲しいことについては配慮をしながら対応しています。特に今回は被害を受けた被害者が小学生ということで 同世代の子どもを持つ親御さん、さらには同世代の子どもたちにとっても 非常にショッキングな心の傷になりかねないことがあります。私たちの報道も事実を伝えることは使命ですが、その伝え方は、その時々状況によって議論しています。この事件の詳細を伝えることによって、再発防止、そして二度と起きないための安全管理のあり方、社会が良くなっていく方向に私たちの取材がなんらかのきっかけになればと、日々議論を進めながら報道しています。

ユニバーサルアクセス権について

Q. WBC のユニバーサルアクセス権に関連して、文部科学大臣が議論の場を作ると公表しましたが日本テレビのスタンスは。

A. スタンスはまだ決まったものではありません。引き続き、諸外国の例などを詳しく研究しているという状況です。難しい問題があると思いますが、ユニバーサルアクセス権が日本にあったらどうなんだろうということも含め、色々考えてみたいと思っています。放送局によって考え方も違うので、どこかで集約していく必要もあると考えています。

Q. 難しい問題とは。

A. 放送権料が高騰していることとは別の問題だと考えています。ユニバーサルアクセス権があれば安くなるということではないと思いますし、ふさわしいものがあるのか、ないのか、から検討していかなければならないと思っています。

「月曜から夜ふかし」の Netflix での配信について

Q. 「月曜から夜ふかし」がNetflixで配信すると発表されましたが狙い、期待は。

(澤取締役専務執行役員)

A. 海外の方々から見たいという要望を随分いただいています。レギュラー放送して15年目になる日本テレビを代表するバラエティー番組を世界中の皆様に楽しんでいただきたいと考え、今回の決断に至りました。日本のリアルな空気感、ユーモア、これが海外にどの程度浸透していくのか、受け入れられていくのか楽しみであり、我々にとって前向きな決断と考えています。

総務省の実写コンテンツの海外展開強化計画について

Q. 総務省の実写コンテンツ展開力強化官民協議会がアクションプランをまとめましたが、日本テレビとしての考えは。

(澤取締役専務執行役員)

A. 協議会で示された内容についてはもちろん我々も承知しています。ドラマ、バラエティーなどの実写コンテンツの流通を強化促進していくという方針、あるいは海外に通用する人材を1,000人育成したい、というような考え、方針に我々は全く異論はありません。ただし、現実的に具体的にどういうふうにやっていくのか、現時点では見えていないので、その方向が見えてくれば我々としても前向きに検討あるいは参画してまいりたいと考えています。現段階ではNHKさんのいわゆる還元目的積立金をどう使うか具体的な運用が見えていないので、わかった段階でまた新たにコメントなり方針なりをお伝えしたいと思っています。

Q. 各局の方向性が違うなか、業界全体でやっていく意味は。

(澤取締役専務執行役員)

A. 各局の方針や目指す方向性というのは必ずしも一致していないので、個別の競争が基本であると考えています。コンテンツの見本市での展開などは、韓国は大規模にやっていますが、日

本は大きく展開していないので例えばこういうところから協力していくのは十分にあり得る話だと思っています。

音響効果担当者の不正請求について

Q. 音効担当者が日本音楽著作権協会(JASRAC)に不正請求を行った事案についてどのような対策を講じていますか。

(柴田取締役副社長執行役員)

A.当社の番組制作に携わってきた音効会社の関係者が逮捕されたことは極めて遺憾です。警視庁の捜査には適宜きちんと協力しており、今回の逮捕に至っていると思います。同様の事案が起きないように、業務フローと仕組みを構築しました。昨年から、自動的に楽曲報告を行える「フィンガープリント」を使用することを原則とし、こういった見逃しがないように徹底しています。

(了)

福田 博之 代表取締役社長執行役員

柴田 岳 取締役副社長執行役員

澤 桂一 取締役専務執行役員

岡部 智洋 取締役執行役員

※回答者名のないものは、福田社長による回答です。